

大塚薬報

Otsuka-people creating new products for better health worldwide

昭和25年2月創刊
平成29年4月10日発行

●
OTSUKAYAKUHO
2017/NO.724

4



北海道・社会医療法人 恵佑会第2病院

〒003-0027 北海道札幌市白石区本通 13 丁目北 7 番 1 号
<http://www.keiyukai2.jp/>

- 院長：高橋宏明
- 設立：2012 年
- 病床数：135 床
- 診療科：内科、消化器内科、放射線診断科



早期発見と治療で地域のがん医療に貢献

外 科系以外の高度な医療

札幌市の中心部から東へ5キロの白石区にあって、「悪性腫瘍の診断、治療、再発、終末期医療を一貫して行う」ことを基本理念に北海道のがん治療の一翼を担う社会医療法人 恵佑会札幌病院（細川正夫理事長、平川和志院長・229 床）を訪ねたのは一昨年の初夏のことであった。（本誌 No.708 / 2015 年 9 月号掲載）

その際には、札幌病院のがん医療の評価を裏付ける専門病院としての一貫した質の高い医療の提供、ハード、ソフト両面の充実ぶりと高い治療実績を目の当たりにしたものである。特に細川理事長が先頭に立って日本一の件数を誇る食道がん手術をはじめ、消化器関連の内視鏡検査、手術、治療、近年増加傾向が著しい泌尿器科手術などを中心に高度な最先端医療を展開している。

まさに同院のがん治療への取り組みの徹底ぶりは、多くの分野で平均的な診療を行うのではなく、得意分野で突き抜けた実績をあげることで、患者、社会に貢献できる病院づくりに努めるという「細川イズム」の真髄といえる。そして、昨年 12 月に訪

れた恵佑会第 2 病院（細川正夫理事長、高橋宏明院長・135 床）もまた、質の高いがん医療を目指す恵佑会における枠組みの中で、消化器内科部門の最前線としてその一翼を担っている。

第 2 病院は、札幌病院から 100 m ほど離れた場所に平成 24 年（2012）3 月 1 日に開院して今年でちょうど 5 年目になる。同院の理念に掲げられているように「自分の家族が安心してかかる病院」ということを主眼にして運営されている。診療科は内科、消化器内科、放射線診断科の 3 科で、札幌病院を補完する役割を担っていて、外科系以外の高度な医療を行える病院として位置付けているのが特徴だ。

第 2 病院は特にがんの早期発見および治療に取り組むことを目的に、内視鏡検査・治療を中心とした高度な内科医療を提供するという機能を鮮明に打ち出している。これは今日のがん医療に求められる、高性能機器を使った診断や侵襲の少ない治療などの変化や進歩に迅速に対応するという側面も考慮していることだ。

もちろん、一昨年 6 月に発売早々に道内で初めて導入したダ・ヴィンチ Xi による手術や MRI、PET-CT などの高性能機器を用いての専任医師の画像診断、強度変調放射線治療（IMRT）、画像誘導放射線

治療（IGRT）など、安全性や確実性に配慮した最先端医療を実践する札幌病院とのハイレベルな“目線合わせ”もあってのことでもある。

こうした機能分化を図ったうえでの札幌病院との緊密な連携で、両院揃った“オール恵佑会”による「診断・治療・再発・終末期」の一貫した診療体制を構築している。その意味でまさにがん医療における地域中核病院といえる姿を完結しているといえよう。

化器系 ESD で高い実績

札幌病院にしても第2病院にしても、いわば地域医療圏である札幌市周辺の患者が多いのは当然だが、北海道全域からやってくる患者も少なくないという。これについて「各地のがん患者を抱える家族がインターネットなどで当院のことを調べてくる場合と、診療所や病院の医師がメディアなどを通じて当院の診療実績などの情報を得て患者を紹介してくる場合があります」と高橋院長は語る。

一方、札幌病院が地域がん診療連携拠点病院に指定されていることから、同院も自ずと地域連携の枠組みの中でその機能を発揮していることは言うまでもない。「地域医療、特にがん医療の面でネットワークを充実させ、道内全域の患者さんへ情報および医療を提供する」という札幌病院と同じ基本方針を謳っているのもそのためだ。定期的に行っている近隣の医療機関の医師たちを交えた研究会や地域住民向け講座の開催、さらには遠く離れた釧路、室蘭、函館などにも出向く講座による啓発活動も行うことで、患者やその家族がまずは気軽に相談に来ることができる体制づくりにも余念がない。

札幌病院および第2病院の高度な医療が前提の両院の情報発信力の大きさが結果に現れている。同院の得意とするところの検査件数、手術件数を見てみると、いかにその実績が傑出したものであるかが分かる。以下が2015年の内訳である。

上部消化管内視鏡検査 7,576 件、食道 EUS（超音波内視鏡検査） 354 件、胃 EUS 55 件、胃 ESD（粘膜下層剥離術） 168 件、食道 ESD 118 件、下部消化管内視鏡検査 3,401 件、大腸ポリプ切除 911 件、大腸 EMR（粘膜下層切除術） 428 件、大腸 ESD 68 件、小腸カプセル内視鏡検査 39 件、小腸ダブルバルーン内視鏡検査 18 件――。

がん医療の中でもとりわけ消化器内科部門の最前線に立つ病院として、札幌病院と併せた院内完結型医療の重要な役割を担っていることを裏付ける数値といえるだろう。

この背景には「がんの早期発見、早期治療を目指して、より多くの患者さんを迎え入れる体制にすることはもちろんですが、内視鏡検査を気軽に受けてもらえるような、いわば“敷居の低い”病院にする。そのために、鎮静剤を使用した“苦痛の少ない”内視鏡検査を行う、検査に至るまでの時間をできるだけ短くして待たせないようにする」（高橋院長）といった姿勢もある。がん診療のゲートキーパーとしての意識込みを感じる。

さらに、効率よくスピーディーに処置していくことにも力を注いでおり、1日に60～70人の内視鏡検査をこなす5室の内視鏡室はフル稼働だ。この内視鏡室、全てが個室になっているが、部屋と部屋の間が洗浄室になっていて、構造的にも効率を追求していることが分かる。ここで働くスタッフは看護師5名、パートの看護師2名、洗浄助手4名だが、案内されたとき、スタッフ同士の一体感ときびきびした動きが印象的だった。

実はこうした印象は、院内を案内されて取材している間、他の場面でも随所で見受けられたものだ。働きやすい環境なのだろう。カンファレンスやミーティングによる情報共有はもとより、医師からコメディカル、事務部門にいたるまで部署の垣根を越えた交流も積極的に行われている。「そのことによって病院医療とは何かを知り、患者さんの目線で自分たちの仕事の意



内視鏡検査室



洗浄室 多くの検査をこなすために、内視鏡検査室の間に洗浄室を設けて動線短縮



咽頭麻酔のための前処置室



リカバリー室 10床ありナース1名が常駐



診察室



生理検査室 バックヤードから続いている。



内視鏡、X線・CT受付 バックヤードでつながっている。



最新鋭のMRI

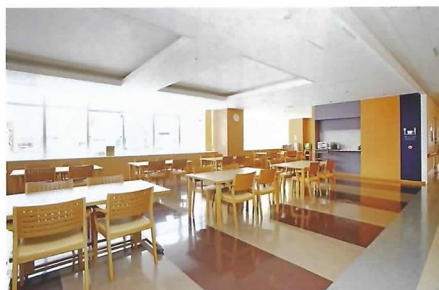
味を改めて考えることができます」という話を聞いたとき、この病院のチーム医療のレベルの高さが分かる気がした。

ハードもすべて患者目線で

働きやすい環境はハード面においても見て取れる。同院を訪れたのは、12月半ばとしては記録的な大雪に見舞われた翌日だった。札幌市内の道路端には除雪された雪が山のように積まれ、道路は除雪が追いつかなかった雪が凍結していた。車で市内の渋滞をくぐり抜け、ようやく同院の駐車場に入ったのだが、ここだけは雪

もなく難なく駐車できたのだ。道路や駐車場の舗装内の融雪および凍結を防止するために路面の温度を上げるロードヒーティングを採用しているということだった。来院者にとってこの時季、こんなにありがたいことはない。病院に来て転倒して怪我でもしたらシャレにもならない。

玄関から広めの瀟洒な美術館の入口のような風除室を通り抜けたエントランスロビーは穏やかな雰囲気だ。柔らかなベージュや茶系の色彩でまとめられた床、壁と抑え気味の照明が心を鎮めてくれるようだ。大きな窓からは陽の光が降り注いでいる。ロビーの右手には患者の待合ロビーとは別に明るいスペースがある。患者と



ダイニングラウンジ（2階）



スタッフステーションからダイニングラウンジが見渡せる。



点滴棒の脚の色も2～4階のフロアカラーに合わせている。患者もスタッフもどの階の患者かわかり易い。



4床室



2階トイレ



4階病棟スタッフステーションでのチームカンファレンス



調剤室（1階） 病棟の看護師と薬剤師の連携も極めて良好



病院正面玄関



CT室の待合室ベンチ デザイン性だけではなく、驚くほど座り心地が良い。



1階ロビーのイスやソファー 床とソファーの色を合わせるなどの工夫もだが、座り心地も抜群



家族の談笑の場としてここを利用する人は少なくない。それに来院者によっては都合のいい場所、例えば我々のような者、業者、MRなどが“取りつく島”になるありがたい空間なのだ。

1階には薬剤部調剤室、X線TV室、内視鏡室の他、外来対応の診察室4室（内、1室は救急搬送された場合の処置室兼用）、生理検査室があるが、診察室と生理検査室はバックヤードでつながっている、仕事をする上でたいへん都合が良い。1階から病棟までを貫くスタッフ専用のエレベーターも効率的だ。

2階から4階は病棟だ。2階がホワイトイエロー、3階がモスグリーン、4階がシャーベットオレンジとイメージカラーを分けているのだが、床、壁などがうまく、しかもさりげなくそれぞれのカラーに合わせてコーディネートされていてデザイン性も優れている。

スタッフステーションは、病室への移動がしやすい位置にあって、そこから目の届く場所に

ダイニングラウンジが設けられている。病棟担当として薬剤師も2人ずつ配置されるようになった。チーム医療を進める上で欠かせない医師、看護師、薬剤師によるカンファレンスもここで行われる。

ハード面におけるスタッフの働きやすい環境も全て患者目線で考えてつくり上げられていることがよく分かるが、医療安全に関する基本的考え方や個別事案に対する予防、再発防止策の周知徹底のために定期的な職員に対する安全教育・研修を実施するなど、ソフト面での仕組みもレベルが高い。

取材を終える頃、雪がちらつき始めた。ロビーの窓の外とパテオに風花が舞う光景がシックな内装のフロアから眺めると、これが実によく似合う。案内していただいたスタッフの皆さんに見送られて、自分が癒された思いで同院を後にした。